



Title	兵庫県西宮市瓦木深津地区における地域ボランティアによる小中学生への学習支援についての参与観察
Author(s)	
Citation	令和5（2023）年度学部学生による自主研究奨励事業研究成果報告書．2024
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和5年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	さかべゆいと 坂部結生翔	学部 学科	人間科学部 人間科学科	学年	3年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教育支援員 氏名	高田一宏	所属	大阪大学大学院人間科学研究科		
研究課題名	兵庫県西宮市瓦木深津地区における地域ボランティアによる小中学生への学習支援についての参与観察				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。（先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。）				
■概要 本研究活動は、西宮市瓦木深津地区における教育文化の特徴を、特に教育支援員や地域の人間から児童に対して行われるものについて記述収集し、一次情報として完成させることを目的に、本年度の「学部学生による自主研究奨励事業」に応募し認可されたものである。 当該地域は被差別部落のあった地域を含んでおり、当該地域の学校施設では、困難な家庭的背景を持った生徒も在籍している。一時期は、いくつかの中学校で「荒れ」の問題が多発していたというが現在は穏やかな学校文化が形成されているようである。しかし、学校教育の現場では未だ課題は残っており、その中の一つとして「不登校」の課題が挙げられる。2023年に全国の小中学生における不登校生徒数が約30万人へと増加しているように、当該地区でも、西宮市内中学校における不登校児童生徒の割合は、平成25年度から令和2年度までの間に2.63%から5.37%へと増加しているように、より多くの生徒が、学校に行きづらいという課題を抱えていることがわかる（田中 2022）。 西宮市で行われている不登校生徒への支援については、不登校児童生徒（何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの）に対して、居場所づくりや自立支援に向けた活動が、西宮市教育委員会により積極的に展開されている。しかし、それらの活動の現場について第三者から詳細に述べられた情報は現在のところ確認できていない。 これらを踏まえ、西宮市の当該地域における不登校生徒への支援について、その一次情報を創出することに一定の意義があると考え、本研究を構想した。 ■研究方法 西宮市教育委員会が行っている、不登校支援の現場に関する一次情報の創出を目的とした。 研究内容としては、兵庫県西宮市教育委員会学校保健安全課が所管している、教育支援センター「あ					

すなろ」(以下「あすなろ」と表記する)である「あすなろ かわらぎ」(以下「かわらぎ」と表記する)と「あすなろ なるおきた」(以下「なるおきた」と表記する)に、学習補助サポーターとして複数回訪問し、参与観察の形態をとりながら教育現場の様子を随時記述していくという形で行った。なお、かわらぎについては7月から訪問を開始したが、なるおきたについては、かわらぎの教育支援員のかたに紹介していただき、10月5日から新たに訪問を開始した施設である。

2023年7月～12月までの月曜日から木曜日の午前中の期間、「かわらぎ」「なるおきた」それぞれに訪問を繰り返した。

当該地域を研究対象とした理由は、先行研究を渉猟した際に、学術機関から当該地域における、不登校支援に関する一次情報の収集を行ったという実践が未だ無かった点と、この地域における教育文化の一次資料の創出により、今後の新たな教育社会科学研究の土台作りに貢献できると考えたためである。また、当該施設を選択した理由は、これらの施設が地域教育の実践の場として未だ日が浅く、その創成期にあたる資料を作ることによって一定の意味があると考えたためである。一次資料の創出を目的としたため、本研究では現場の客観的な情報をまとめることを優先し、それに加える形で、教育支援施設に対して第三者の立場である筆者が、参与観察を行う中で感じた点を付け加えた。

なお、訪問で得られた記述情報を随時整理し、アドバイザー教員からのアドバイスを得つつ、着眼点の整理にも努めた。また、今回は生徒の個人情報保護の観点から、生徒に関する記述は避け、教育支援員の働きかけ方に着目した。

■結果と分析

フィールドワークによって得られた情報を本項目に、{施設概要} {教育システム} {教育支援員から生徒へのかかわりかた} に分けて記載する。

1. {施設概要}

「あすなろ かわらぎ」

長期間、学校に登校できていない状態にある児童生徒に対して、社会的自立のための支援を行う施設の小中学生を対象に開かれた教育支援センターの一つである。所在は西宮北口駅周辺の瓦木深津地区である。建物は休園中の西宮市立瓦木幼稚園を利用している。閑静な住宅街にあり、向かいには小さな公園と、奥に幹線道路が走る。施設の隣には保育園があり、園児の声が聞こえてくることもある。玄関には「あるなろかわらぎ」の文字が描かれたカラフルな看板が掛けてあり、扉はピンク色である。玄関を開けると「エリーゼのために」の音楽チャイムが流れるようになっており、教育支援員は生徒の来訪がすぐにわかるようになっている。また外観としては、外壁は白く、二階建ての建物である。

内部の部屋割については、一階の玄関の目の前に職員室があり、職員室の前にはプログラムが描かれたホワイトボードがある。職員室に向かって右手側に活動室、その奥隣には階段を挟んで交流室という、グリーンカーペットを敷きクッションやソファのある部屋がある。休園した幼稚園の建物を使っているため、活動室の椅子や机は園児サイズの小さいものである。職員室に向かって左手には給湯室と多目的トイレ、サポーターの控室(ロッカールーム)、談話室がある。階段を上がり2階には目の前に活動室、階段を上がり左右に活動室がある。左手壁面には図書スペースがあり本棚がある。二階の活動室には中学校で使われるタイプの学習机と椅子が20席ほど等間隔に空けてならんでいる。活動室後方には雑紙や小中学校の参考書、教科書、辞書などが入った棚もある。

施設の職員としては、教育支援員が5名常勤している。教育支援員は元教師や幼稚園教諭、また心理

士として西宮市に登録されているかたなどからなっている。これに加えて大学生サポーターとして登録しているものが複数名おり、毎日サポーターが1, 2人程度は入るように調整されている。

「あすなろ なるおきた」

かわらぎ同様に、長期間、学校に登校できていない小中学生を対象に開かれた教育支援センターの一つである。「かわらぎ」同様に休園中の幼稚園を利用している2階建ての建物である。外観はカラフルな壁面と外壁であり、小さな運動場と遊具が存在する。玄関を通ると施設内にチャイムがなり、生徒や来訪者の存在がわかる。

入口の門を通ると、まっすぐ進んで目の前に二階へと続く階段があり、左手に玄関、右手に運動場に面した活動室が見える。玄関で靴を履き替えて中に入るが、上履きと外履きの区別が混交する学校玄関らしいシステムである。玄関を通ると、左手に職員室、右手に給湯室と談話室、奥に進んで右手側にサポーター控室と六畳間の和室がある。二階に上がると、上がってすぐ右手に活動室（かわらぎよりも天井が高い）、左手側に広い活動室が二つある。活動室内部は学校と同様に学習机と椅子があり、すべて等間隔で並べられている。感染症対策のためか、机の上には一つ飛ばしごとに「×」の印のクリアファイルがおかれている。活動室後方にはかわらぎと同様に参考書や辞書、加えて読書タイムで読むことができるリサイクル図書の棚もおかれている。壁面には睡眠の重要性を説明した手作りポスターなどが掲示されている。

施設職員の構成はかわらぎと同様に支援員が4名配置されており、これにサポーター登録しているものが複数名いる。また、かわらぎと異なり、サポーターの受け入れは午前の部のみとなっている。

2. {教育システム}

「あすなろ かわらぎ」

開館の曜日は毎週月曜日から木曜日までであり半日制を執っている。午前（9:15～11:45）と午後（12:45～15:00）までのクラスに分かれており、生徒は基本的にどちらか一方のみに参加している。午前は「プログラム制」、午後は「フリーセクション制」という形式で進められており、プログラム制では、教育支援員が決めた時間割に沿って生徒たちが活動に参加する形態である。フリーセクション制はかわらぎに特有であり、通所時にすべての時間割を生徒が自主的に選ぶことができる。活動の枠としては活動室で行う自学自習の時間である「マイスタ」、教育支援員が自身で用意した教科学習を行う「かわらぎスタディ」、スポーツなど活動室で体を動かす時間である「スポーツ」、そして交流室でカードゲームなどを行う「交流活動」の4つの区分がある。それぞれ40分前後の時間である。

「マイスタ」の時間では生徒が自宅から持参した学習参考書や学校の課題プリントなど、教科の指定もせず生徒が自分自身で自由な学習を行う。生徒が学習する様子を、教育支援員やサポーターは生徒一人ひとりを見回りつつ、また特定の生徒の隣で座ったり立ったりしながら、困っているところで、計算のやりかたや言葉の説明などで支援に入る。学習に取り組まない生徒もあり、その場合は教育支援員とのコミュニケーションをして過ごして言う生徒もいる。「かわらぎスタディ」の時間では、教育支援員が輪番で担当しており、その日にちなんだクイズ形式の活動（例えば10月10日「目の日」には目にまつわるクイズなど）や、自身の得意分野を生かした活動（心理士の教育支援員が、認知と錯覚についての活動を行うなど）、また学校でも行うような地域社会についての活動（社会科元教育支援員が西宮市の地図を使用して地図の読み方を教える活動）など、様々な活動を展開している。「スポーツタイム」の時間については、2階活動室で毎回行っており、プログラム制である午前は、担当教育支援員が決めた内容を執り行う。エアバレーやドッチビー、ボッチャ、卓球など、衝撃のない球を

使った競技がメインである。午後は生徒が自身でスポーツの内容を決め、教育支援員とサポーターも試合に加わる。「交流活動」は1階交流室で行う。毎回カードゲームを行っており、「UNO」や「大富豪」を生徒と教育支援員サポーターも交えて行う。またこれらの活動に加えて、聴覚障害者との交流会や、芋ほりなどの活動を行う日もある。

生徒の通所数については、在籍者数20名程度に対して、毎日通所する生徒が2,3名。隔日で通所する生徒が5,6名、通所しない生徒が10名程度いる。生徒が通所するかどうかは生徒や親の判断に任されている。まったく音信不通な生徒もいるが、毎日必ず電話して欠席の連絡を入れている家庭もあり、様々な生徒に開かれた、学校としてではなく飽くまでも「第二の居場所」として「あすなろ かわらぎ」が存在していることがわかる。生徒が通所し玄関のチャイムが鳴ると、毎回教育支援員が玄関まで駆けつけて生徒を出迎える。なお、生徒はスマートフォンを職員室入口の棚にしまい、活動室には持ち込めないようになっている。

「あすなろ なるおきた」

活動の区分は、かわらぎと異なり「プログラム制」のみであり、一日制を執っている。

活動の区分としてはかわらぎ同様「マイスタ」「なるおきたスタディ」「スポーツタイム」「交流活動」であるが、「マイスタ」の時間を午前と午後に毎日組み込まれるようになっており、自学自習の時間が確保されている。活動の形式自体はかわらぎと同様であり、担当教育支援員が決めた内容を生徒と教育支援員サポーターで一緒に行う。

生徒の通所についてもかわらぎ同様に対応されている。登録者数としては35名程度いるとのことだが、通所する生徒の数は毎回10名～15名程度である。またテスト期間には学校に通う生徒もあり、通所する生徒数が少ない日もある。

3. {教育支援員から生徒へのかかわりかた}

「あすなろ かわらぎ」

教育支援員から生徒へのかかわり方の特徴として、生徒の心理的安全への配慮の高さ、生徒の目線に合わせた会話、生徒の自主性を阻害することへの危険視、の3点にまとめられる。

・生徒の心理的安全への配慮の高さ

教育支援員から生徒へのかかわりかたの特徴として、声音の高さがあげられる。

教育支援員は生徒への声掛けの際に、声音を高くして明るい雰囲気と話しかけている。どの教育支援員も玄関で生徒を迎えた瞬間から「おはよう！」と明るく声音の高い挨拶を生徒に行い、そのあとの活動時間や休憩時間でも、笑顔を絶やさず、教育支援員同士での声掛けや、生徒から教育支援員への声掛けもあり、教育支援員は生徒たちへよく笑いかけるように努めている。教育支援員たちのこのような工夫によって、施設の雰囲気は、幼稚園を利用していることもあってか、明るく、優しさに包まれた空気感となっているように筆者には感じられた。

さらに上記事項に加えて、生徒が落ち着きのない行動を起こしてしまった際にも、押さえつけたり腕を引っ張ったりなどはせず、声掛けで宥めるようにしており、身体的な接触などもなるべく控えている点も特徴的である。

また、生徒への心理的安全性の高さを感じたエピソードがある。筆者は施設を訪問する際にフィールドノートとなるA5の手帳を常に携帯しており、教育支援員の許可を得て都度情報を記述していた。しかし、ある日の活動中に教育支援員の一人からメモを取ることをやめるように指摘された。「記述の

内容を万が一生徒が見てしまうと、(自分のことを書かれているのではないかと) ショックを受ける子もいるから」という指摘であった。筆者は別の活動において公立中学校にて同様の参与観察を行っているが、記述を咎められたことは無く初めて受けた指摘であった。このような指摘があったことから、当施設における生徒の心理的安全への配慮の高さがうかがえた。

・生徒の目線に合わせた会話

教育支援員と生徒の関係性は主に「身近な大人」として表現するのが適切であるように筆者には思われた。生徒から教育支援員へは自由なタイミングで話しかけることが多く、会話の内容が個人の趣味についてであっても教育支援員は丁寧に聞いて会話を盛り上げるよう努力している。また、仲の良いコミュニケーションをとれる間柄であることも、生徒の目線に合わせた指導方針であることがわかる。コミュニケーションは活動時間の終了後もしばらく続き、できるだけ生徒の自由な発言が損なわれないよう、話を無理矢理遮ることはしていない。

また、「マイスタ」での指導時にも教育支援員は立ったまま見下ろして指導することはあまりなく(また、立って指導しているサポーターにも座って指導するように促すなど)、基本的に生徒の隣に座って、目線を合わせた対応をしている。

・生徒の自主性を阻害することへの危険視

ある日の「マイスタ」と「交流」の時間において、教育支援員の一人から私の指導方法について厳しい指摘があった。指摘された行動とは、私が交流室で生徒とカードゲームをしていた際に、生徒のカードの配り方に口を出して「こうした方がいいよ」と別案を促したこと、また「マイスタ」の時間に生徒の計算方法を矯正していたことである。指摘の内容はどちらも、「生徒にはそれぞれ個性があってやり方を決めているのだから、それを阻害することはやめてほしい」という内容であり、指摘をいただいた教育支援員の方からは最後に「(あなたは) いい人なので、加害者にならないでほしい」との発言を受けた。この「加害者」という発言内容について、現場の状況や発言した教育支援員の経歴も踏まえて筆者は、「この施設には学校教育に適応できず辛い状況にあるような生徒も、第二の居場所を必要として通所している。そのような生徒に対して、学校現場で受けたような無理な矯正をしてしまえば、生徒から居場所を再び奪うことになってしまい、それは無自覚な加害的な行動である」という意味だと解釈した。このエピソードから、生徒の行動や考え方を否定しないというのは、この施設で徹底されている事項であるのだと、筆者には感じられた。

「あすなろ なるおきた」

教育支援員から生徒へのかかわり方の特徴は、生徒との信頼関係の深さ、学校文化と似通った距離感、の2点にまとめられる。

・生徒との信頼関係の深さ

かわらぎと同様であるが、教育支援員は基本的に笑顔を絶やさず、教育支援員がよく笑うように心がけていた。また、これにつられて生徒が、にこやかになって会話をする場面も多く見られた。生徒が説明を聞かなかったり活動室から出ようとしたりする際には「〇〇さん。戻って!」と多少強く声掛けして、引っ張ってくるような場面もあるが、生徒が教員を怖がっているような素振りは見られず、基本的に教育支援員と生徒間の信頼関係はあるようであり、声の掛けあいも絶え間なく見られた。な

るおきたでの生徒 - 教育支援員間の声掛けは、かわらぎでの声掛けと比較すると、多少「ツツコミ」的な要素が強く感じられた。例えば、生徒が教育支援員に何か冗談を言うと、教育支援員からは「そんなわけないやろ」というような反論的な要素を含んだ返しがみられる。かわらぎではあまり反論的な返しは行われず、生徒の発言をおおむね寛容的に受け止めているため、なるおきたでの声掛けはその点で特徴的に感じられた。

・学校文化と似通った距離感

上記の内容とも関連するが、教育支援員は基本的に「さん付け」で生徒を呼ぶ。かわらぎでは「〇ちゃん」「〇〇君」で呼ぶことが多く、敬称づけの呼び方はあまり行われていない。ここで、中学校の現場での声掛けを例に挙げると、現在私が卒業研究のため参与観察を行っている中学校では、「さん付け」の呼称が主であり、「〇〇君」などの柔らかい呼称は特別支援学級の生徒にのみ限られている。このことから、なるおきたの教育文化は「さん付け」の呼称によって、「第二の居場所」としてのかわらぎよりも「学校」に近い空気感を作りだしている可能性がある。

なるおきたでの活動や指導については、生徒の「第二の居場所」として展開されているかわらぎと比較すると、より学校という社会への適応になるような工夫を凝らしたものが多く見られた。例えば「交流活動」では新聞紙の上にボールを乗せて2人一組になって運んでいき、タイムを競うというゲームがあった。この活動で工夫されていた点は、ボールを運ぶには2人で息を合わせて行動しなければならない点と、新聞紙というあまり丈夫ではない素材でボールという不安定な形状のものを運ばなければならない点である。そのため、生徒は他生徒と密にコミュニケーションを取らなければゴールまで到達することは難しくなっている。なるおきたでは同様のゲームがいくつも考案されているようであり、簡単なゲームを通じて密なコミュニケーションに慣れることを目的として設計されていることが筆者には感じられた。

■おわりに

本報告書では西宮市の教育支援センターでもフィールドワークの成果について収集したできた知見を整理しまとめた。

この報告書では書き切ることはできなかったが、不登校支援の現場における新たな課題についても、教育支援員から伺うことができた。筆者は1サポーターとして参与していたに過ぎないが、7月から12月までの期間の訪問があったためか、生徒に関する情報や、一人の支援員として意識すべき点なども教えていただくことができた。また、2つのあすなろ学級を比較することで今回の報告書の内容を発見することができた。初めに参与していた「かわらぎ」では、筆者も独特の柔和な空気感に衝撃を受けていたが、訪問の回数を重ねるにつれて、教育支援センターとはこのような雰囲気である、と勝手に思い込んでしまっていたことが、なるおきたへの訪問を開始して気づかされた。紹介してくださった先生のご厚意には深く感謝を申し上げたい。

■参考文献

「西宮市の不登校児童生徒数の推移」田中正剛. 2022(2023年12月13日取得 <https://masatake.jp/wp-content/uploads/%E4%BB%A4%E5%92%8C%E5%B9%B4%E5%BC%96%E6%9C%88%E8%AD%B0%E4%BC%9A%E4%B8%80%E8%88%AC%E8%B3%AA%E5%95%8F%E3%80%80%E9%85%8D%E5%B8%83%E8%B3%87%E6%96%99%E3%80%80%E4%B8%8D%E7%99%BB%E6%A0%A1%E5%AF%BE%E5%BF%9C%E3%81%AB%E3%81%A4%E3%81%84%E3%81%A6.pdf>)